

第4章 感情動詞文の機能論

4. 0 本章の概要

感情動詞は、現代日本語研究の上で、実に豊かな研究テーマを含んでいる。特にテンス・アスペクト、モダリティ、人称など、構文意味論に関係のある多くの範疇にまたがって、未解決の問題を多く抱えている。しかし、その豊かな議論に入る前に、このテーマへの関心を示してきた先行研究が、いかなる動詞、いかなる構文を考察対象としているのか自体が漠然としていたことを指摘しなければならない。つまり、感情動詞の定義にかかわる問題であり、4. 1として一節を設けて考察する。4.1.2では文機能の観点から、〈感情表出〉文の述語となり得るかどうかが、その時の時制形態はどうかによって、感情表出動詞・感情変化動詞・感情描写動詞の三分類を提案する。先行研究が言及してきた文法現象は、概ね、「感情表出動詞」の文法的特徴に着目したものであった。これに対し、文機能の記述、語彙の記述といった課題を明確にし、4. 2以降の具体的論述へと進む。このように、4. 1を通じて感情動詞をめぐる諸問題を明らかにしていくので、本節とともに本章全体の序論として位置づけられる。

「感情表出動詞」の文法的特徴については、テンス・アスペクトを中心に、考察すべき問題が多くあり、特に4. 2を設けて論述する。その上で4. 3において、感情表出動詞文が〈感情表出〉の文機能を発動した用例の収集、構文の整理を行うと同時に、感情表出動詞の語彙を記述する。そこでは、感情形容詞文には見られない、発話機能の多様化という特徴が見られることを指摘する。4. 4では感情変化動詞文について、同様の記述を行う。本来なら、4. 5として感情描写動詞文についての記述を行うべきところだが、未解決の問題が多いため今後の課題とし、本論文には含めなかった。

4. 1 感情動詞分類と感情表出動詞

4.1.1 文機能論からの感情動詞分類——感情表出・感情変化・感情描写——

〈感情表出〉とは、話者が発話時の自らの感情を表出する文機能である。(1)は、発話者が発話時における発話者自身の感情を、動詞述語のル形終止を用いて表出する〈感情表出〉文である。

(1) ああ、腹が立つ。

この場合、①文の時制意味が「現在」であること、②経験者格が第一人称に指定される

こと、という二つの際立った現象が見られる。①は通常、状態動詞の特徴とされ、述語でのル形終止が「未来」を表す動作動詞と対立している。また、②は命令や意志などのモダリティに見られる人称指定の現象と類似している。このような現象を見せる動詞、つまり、文の述語がル形終止となった場合に、その文機能が〈感情表出〉となるような動詞語彙を(A)「感情表出動詞」と呼ぶことにする。「腹が立つ、いらいらする」などはこれに当たる。

感情形容詞文でも、この①②に該当するものは〈感情表出〉文であり、両者の意味内容、表現効果はほとんど同じように思える。比較のために語根が共通するものを並べてみた。語彙の近親性以上に、構文の近親性に注目したい。

(1) a. ああ、腹が立つ。 +[I]^{Ex}

b. ああ、腹立たしい。 +[I]^{Ex}

(2) a. 胃が痛む。 +[I]^{Ex}

b. 胃が痛い。 +[I]^{Ex}

次に、同じくタ形終止の場合に〈感情表出〉となる語彙もいくらかある。つまり、過去形でありながら時制意味が現在となるという特殊な用法である。この用法を持つ動詞語彙を(B)「感情変化動詞」と呼ぶことにする。「あきれた、困った、足がしびれた、腹が減った」などがこれに当たる。工藤(1995)は(A)と(B)の区別については言及している。

そして、ル形終止でもタ形終止でも〈感情表出〉とならず、しかも語彙的意味としては(A)、(B)と同様の意味特徴を持つ動詞語彙を、感情の動きを客観的に描写する動詞として(C)「感情描写動詞」と呼ぶことにする。「怒る、悩む、悲しむ、苦しむ、喜ぶ」などがこれに当たる。(C)を用いて話者自身の感情を表出しようとする場合は、テイル形をとらなければならない。その場合も、人称指定が発生しないため、人称指定による第一人称経験者格の省略はできない(文脈や場面などからの省略はあり得る)。

(A)~(C)を総称した全体を「感情動詞」と呼ぶことにする。なお、感情動詞という呼称は先行研究において必ずしも定着した呼称ではない。堀川(1992)、吉永(1997)などでは「心理動詞」という呼称が与えられている。本論文では、形容詞における感情形容詞と属性形容詞の対立は、動詞の中にもパラレルに観察することができると考え、この呼称を用いた。

(A)、(B)、(C)相互の境界に関してはかなり厳格な峻別が可能だが、動詞分類全体の中での位置づけは、決して単純ではない。語彙的意味のアспект上の特徴が、〈感情表出〉の中で用いられる場合と、それ以外の場合とで異なるからである。〈感情表出〉を除外して考えてよいなら、(A)「感情表出動詞」は継続動詞の一種で、(B)「感情変化動詞」は瞬間動詞(または変化動詞)の一種、そして、(C)「感情描写動詞」には両方が混在している。特殊な文機能を発動しない(C)については、他の動作動詞との境界線を引くことが厳密には不可能である。例えば、「笑う」は感情と言えるか、むしろ動作ではないか、というような議論は、「感情」という意味特徴の認定に依存するものだからである。

4. 1. 2 意味特徴による感情動詞分類——思考・情意・感覚・知覚——

感情動詞の語彙の意味特徴を詳しく見ていくと、(A)感情表出動詞、(B)感情変化動詞、(C)感情描写動詞の三分類にわたって、語彙的意味による横断的な交差分類があることに気づかされる。意味特徴については、文機能と直接かかわる先の三分類に比べて、決定的な範疇化の要因に欠けるが、思考・情意・感覚・知覚の四種に整理できる。このような意味特徴を区別する文法上のテストとして、便宜的ではあるが三つの文法的特徴を提案したい。

まず、程度副詞「たいへん、かなり、非常に」などによって修飾が可能な程度性を持っているかどうかで二分される。程度副詞が修飾可能な語彙のうち、経験者格の感覚部位としての肉体の部分の部分ガ格として表現できるものと、できないものとに分かれる。前者の意味特徴を「感覚」とし、後者の意味特徴を「情意」とする。

次に、程度副詞が修飾できない語彙のうち、補文（引用節）を承けることができるものとできないものとに分かれる。前者の意味特徴を「思考」とし、後者を「知覚」とする。

この四分類に基づいて、感情表出動詞は、感覚表出動詞・情意表出動詞・思考表出動詞・知覚表出動詞に四分類される。感情描写動詞についても、この四分類は適用される。4. 4で論述する感情変化動詞は思考変化動詞・情意変化動詞・感覚変化動詞に三分類される。

[表1]は(A)感情表出動詞、(B)感情変化動詞、(C)感情描写動詞の三分類と、意味特徴からの1思考、2情意、3感覚、4知覚の四分類の交差分類を一覧にしたものである。(S)の評価用法は、〈感情表出〉との性格の違いが顕著である。語彙としては感情描写動詞が用いられているので用法として扱う。これについては今後の課題とする。

[表1]感情動詞の文機能論的三分類と意味特徴による四分類について

感情動詞	1 思考	2 情意	3 感覚	4 知覚	S 評価用法
A感情表出動詞 [I]+V-ru	A-1 思考表出 ～ト(～ク)思う	A-2 情意表出 困る	A-3 感覚表出 胃ガ痛む	A-4 知覚表出 見える	S-A 評価表出 (～ニハ驚く)
B感情変化動詞 [I]+V-ta	B-1 思考変化 ひらめく	B-2 情意変化 あきれる	B-3 感覚変化 肩が凝る		S-B 評価変化 (～ニハ驚いた)
C感情描写動詞 I +V-tei-ru	C-1 思考描写 ～ヲ思う	C-2 情意描写 怒る	C-3 感覚描写 顔がほてる	C-4 知覚描写 見る	
程度副詞修飾	×	○	○	×	
補文を承ける	○	×	×	×	
部分ガ格	×	×	○	×	

※左端の欄に記載されている文型表示では、[I]は省略可能な第一人称経験者格、Iは省略不可能な第一人称経験者格（文脈や場面などによる省略は別とする）、V（動詞部）の後は、テンス・アスペクト形式（いずれも異形態あり）を表している。

4. 3、4. 4での用例と語彙の記述においては、このA～Cと1～4の組み合わせを記号として用いる。

4.1.3 先行研究と課題

感情動詞をめぐる先行研究を検討してみると、その多くは上述の「感情表出動詞」について、特に「思う」に典型的に見られるテンス・アスペクト・人称における特殊な文法的特徴に着目していることがわかる。

寺村(1984)p.104では、「動的述語の基本形は一般的に未来の事態を表すが、現在の事態を表す場合もある」とし、「音ガスル」「匂イガスル」などの感覚表現や、「思う」「信じる」「考エル」「困ル」などの思考の表現は、感情形容詞と共通点を持ち、述語基本形では、その感情の主体が必ず話し手自身であると述べている。ここで寺村は、感情表出動詞について、語彙分類としては動的述語の一種と認めており、述語基本形の場合に限って、現在時制や第一人称への人称制限が発生する特殊な「用法」として位置づけている。

また、高橋(1985)pp.64-65は、「『おもう』『かんがえる』『信じる』『気になる』など、考えや思いをあらわす動詞の完成相非過去形が一人称につかわれると現在の動作をあらわす」ことを指摘するが、これも語彙ではなく、用法としての位置づけである。これについて、「この『おもう』は、アスペクト的な意味において、完成相でも継続相でもないのである」としているが、そのことの実証的な考察は行われていない。

このような用法としての位置づけを与える論考に対し、語彙分類として範疇化するものもある。例えば、町田(1989)pp.27-35は、「～見える」などの知覚を表す動詞と、「～思う」などの思考を表す動詞を、存在、必要、関係、能力を表す動詞群とともに「状態動詞」の一種として扱っている。

工藤真由美(1995)p.45では、アスペクト対立が有る動詞を〈外的運動動詞〉、アスペクト対立が無い動詞を〈静態動詞〉とするが、思考、感情、知覚、感覚などは、スルとシテイルの対立があるが、継続性の有無だけで対立しているのではないことから、中間に位置づけ、アスペクト対立が部分的に変容した〈内的情態動詞〉としている。ただし、その一方でp.71では、内的運動動詞として、外的運動動詞とともに運動動詞の下位分類とすることも可能だとも述べており、位置づけが定まっているとは言えない。

工藤のように、動詞をアスペクト的特徴から分類しようとすることの淵源は、言うまでもなく金田一(1950)に遡ることができるが、そこでは実はこの種の感情表現については全く触れられていなかった。

というのも、4. 2で詳しく論じるが、感情を表す動詞の語彙的意味とアスペクト的特徴との間に必然的な関係が見いだしにくいからである。例えば「怒る」のように、意味特徴としては「腹が立つ」と同類と思われるにもかかわらず、述語ル形終止で話者の発話時の感情を表すことができない語彙がある。本論文では「感情描写動詞」と呼んでいる。この二語を見る限り、「腹が立つ」は状態動詞(句)で、「怒る」は動作動詞だなどという

4. 1 感情動詞分類と感情表出動詞

分類がありえないことは言うまでもないが、両者ともに中間に位置づけてすむ問題でもない。「怒る」以外にも「悲しむ、苦しむ、いらだつ、喜ぶ」など、感情を表してはいるが、ル形終止で話者の〈感情表出〉の述語とならない感情描写動詞は少なくない。どの先行研究もこのような感情表出動詞と感情描写動詞の関係について言及していない。感情変化動詞については、言及したものが工藤(1995)ぐらいしか見当たらない。

以上から言えることは、先行研究では典型的な文法現象の指摘が行われているものの、正確で緻密な現象の記述には至っていない。今後は、従来「用法」とされてきた文機能の記述や、そうした文機能に用いることのできる語彙の記述という二段階の手続きを緻密に行っていくことが必要だと考える。

改めて先行研究の問題点を整理するならば、概ね以下の四点に集約されるであろう。第一に、〈感情表出〉の文機能がどのような条件下で発動するか、すなわち命題内容条件が正確に記述されていない。第二に、〈感情表出〉に用いることのできる動詞の語彙（感情表出動詞と感情変化動詞）が十分に記述されていない。第三に、動詞分類全体の中で整合的に位置づけられていない。第四に、〈感情表出〉の「現在時制」や「状態性」の本質が明らかにされていない。

第二の点については、4. 3、4. 4で行う。また、第三の点については、2. 5で考察を行っている。第一と第四の問題については、4. 2で一節を設けて論じることとする。

4. 2 感情表出動詞の文法的特徴

4.2.0 本節の概要

前節では、感情動詞分類の案を提示した上で先行研究の問題点を指摘した。本節では、その問題意識に従って考察を行う。4.2.1 では、感情表出動詞が〈感情表出〉の述語となるのはどのような命題内容条件のもとにおいてであるかを検証する。4.2.2 ~ 4.2.4 では、感情表出動詞のアスペクト上の性質について検討し、接辞-tei-を伴わない動詞文に一種の状態性が発生する理由について考察する。その際、〈感情表出〉という文機能そのものの性質からも考察を加える。さらに、4.2.5 では、感情表出動詞と感情描写動詞とがアスペクト的性質において共通しているにもかかわらず、前者はル形で〈感情表出〉となり、後者はそうならない理由について項構造の違いを指摘する。

4.2.1 〈感情表出〉の命題内容条件

感情表出動詞文が常に〈感情表出〉文となるとは限らない。そのことを文機能論の理論的枠組みから確認しておきたい。まず初期条件について、以下の通りである。

〈感情表出〉の命題内容条件（初期）

- ① 述語が感情性述語であること
- ② 主語が第1人称経験者格であること ([I]^{Ex})
- ③ 非過去時制辞を接続すること
(ただし、述語が感情変化動詞の場合は、過去時制辞を接続すること)
- ④ モダリティ付加辞を接続しないこと
- ⑤ アスペクト接辞-tei-を接続しないこと

この第一条件の感情性述語を「感情表出動詞」に指定すると、次のようになる。

〈感情表出〉の命題内容条件

- A 述語が感情表出動詞である場合
- ② 主語が第1人称経験者格であること
- ③ 非過去時制辞-ru を接続すること
- ④ モダリティ付加辞を接続しないこと
- ⑤ アスペクト接辞-tei-を接続しないこと

ここでは、「腹が立つ」を感情表出動詞とし、例文によって命題内容条件を確認したい。

- (1) ああ、腹が立つ。 + [I]^{Ex}
- (2) 次郎はきっと腹が立つ。 (Ex=3人称、未来時制意味)
- (3) 次郎は政治家の怠慢に腹が立っている。 (Ex=3人称、アスペクト接辞あり)

4. 2 感情表出動詞の文法的特徴

(4) 次郎は政治家の怠慢に腹が立つらしい。(Ex=3人称、モダリティ付加辞あり)

(5)*私たちは皆、腹が立つ。

(6) 私たち国民は皆、政治家の怠慢に腹が立っている。

(Ex=1人称複数、アスペクト接辞あり)

例文(1)~(6)の中で、〈感情表出〉文は(1)だけである。(2)~(4)は3人称の経験者格(Ex)が主題となっており、条件②に反する。

(2)は「次郎が星を見る」のような文と同様で真偽値がある。検証可能な客観的現象としての状態だからである。その文機能は〈事象描写〉である。一方、(1)は「星が見える」のような文と同様で真偽値がない。検証不可能だからである。誠実な発話であるか否かについては、話者自身に限ってその違いはあるが、それを真偽値にするということは真理関数の基本的原理に合わない。要するに、本当には腹が立ってはいなかったとしても、(1)を発話すれば、その〈感情表出〉は間違いなく遂行されてしまう。その意味では常に真だと言ってもよい。

(3)、(4)は、時制意味は現在だが、それぞれアスペクト接辞、モダリティ付加辞がついている例である。(3)の主題「次郎は」がなかったとしても、〈感情表出〉文ではなくなる。そのことを表しているのが条件④、⑤である。(5)、(6)は経験者格が1人称複数であるような例だが、(5)は非文であり、(6)は非文ではないけれども、〈感情表出〉文とは言えない文である。このように、〈感情表出〉文が成立するかどうかは、「腹が立つ」という語彙だけで決まるわけではない。このことは感情形容詞による〈感情表出〉の場合と全く共通している。なお、(3)、(6)は〈状態描写〉であり、(4)は〈事象描写〉である。

以上のように、命題内容条件の妥当性が確認される。

4.2.2 感情動詞のアスペクト上の特徴

4.2.2.1 テイル形について

〈感情表出〉という文機能はどの動詞でも等しく発動するような文機能ではなく、適用される語彙がかなり制限されており、そのため問題の現象を当該の語彙そのものの特徴のように錯覚しがちである。しかし、既に見たとおり、感情を表すという語彙的意味においては共通しているのに、どうして〈感情表出〉に使えるものと使えないものに分かれるのかということについて、説得力のある解答はまだ見出せていない。改めて語彙的意味の類似する例を比べてみたい。

(1)a. ああ、腹が立つ。+[I]^{Ex}

b.*ああ、怒る。

(2)a. ああ、いらいらする。+[I]^{Ex}

b.*ああ、苛立つ。

しかも、他人の感情を描写する構文に用いられたものを見比べてみて、両者のアスペクト的特徴に差異があるようにはほとんど思えない。

- (3)a. 山田次郎は政治家の怠慢に腹が立っている。〔感情表出動詞〕
 b. 山田次郎は政治家の怠慢に怒っている。〔感情描写動詞〕
 (4)a. バスを待つ男はいらいらしていた。〔感情表出動詞〕
 b. バスを待つ男は苛立っていた。〔感情描写動詞〕

「怒る」や「苛立つ」は〈感情表出〉文を作れないのだから、動作動詞の一種とするしかない。そのテイル形と差異がない以上、「腹が立つ」や「イライラする」も、アスペクト基準の動詞分類では、別な範疇化を行うわけにはいかない。

この点からは、次のように言える。

「感情表出動詞」と「感情描写動詞」を隔てるのは、アスペクト上の違いではない。

動作の継続か、変化結果の継続かという点では、これらはすべて動作（感情）の継続である。ただし、感情表出動詞と感情変化動詞はアスペクト的に異なる。それぞれ継続動詞と変化動詞に対応する。感情描写動詞には、継続動詞と変化動詞が混在している。

4.2.2.2 他のアスペクト形式の付加について

「～ハジメル」は、過程性を有する動作動詞にのみ付加し得るアスペクト形式である。これらが付加し得る動詞は、状態動詞とは言えない。従って、この点からは「腹が立つ」は状態動詞ではなく、時間的推移つまり変化量を含み持つ動作性動詞ということになる。

- (1) 正夫は腹が立ちはじめた。 (1)' 雨が降りはじめた。

また、開始的実現の「～テクル」も付加できる。

- (2) 正夫は次第に腹が立ってきた。 (2)' 次第に雨が降ってきた。
 (3) 正夫は今に腹が立ってくる。 (3)' 今に雨が降ってくる。

ただし、補助動詞「～オウル」、「～テイク」は付加できない。

- (4)*正夫は腹が立ち終わった。 (4)*雨が降り終わった。(降り止んだ)
 (5)*正夫は次第に腹が立っていった。(5)*次第に雨が降っていった。
 (6)*正夫は今に腹が立っていく。(6)*今に雨が降っていく。

感情の成立に際しては時間的推移が認められるが、一度成立した感情の進展や終結には意識が及ばない、と考えられる。森山(1983)は、～オウルをつけることができるのは、動きの全体量が決まっているものに限られると指摘している。従って、「雨が降る」などの継続動詞もほぼ同じ振る舞いを見せる。「腹が立つ」を感情描写動詞「怒る」に入れ替えても、文法性は変わらない。従って、次のように言える。

「感情表出動詞」はアスペクト的には（感情描写動詞と同じく）動作性動詞である。

要は「状態性」を持っていないということだが、更に細かく言うと「継続動詞」である。

4.2.2.3 感情表出動詞のル形の時制意味

文脈によって、時制意味が未来となったり、現在となったりする。

- (1) 息子は遊んでばかりで困ります。+[I]^{px} (感情表出→現在)

- (2) 君、遊んでばかりいると今に困るよ。 (予告→未来)
 (3) さすがのあの男も、これでは困るにちがいない。 (推量→未来)
 (4) あいつ、ずいぶん困るみたいだ。 (感情描写→現在)
 (5) ああ、腹が立つ。 +[I]^{Ex} (感情表出→現在)
 (6) 君、あの男と話してごらん。きっと腹が立つよ。 (予告→未来)
 (7) こんなことでは、みんな腹が立つだろう。 (推量→未来)
 (8) あいつ、かなり腹が立つらしい。 (感情描写→現在)

結局、4.2.2.2でも述べたとおり、「感情表出動詞」は、動詞の意味特徴としては状態性を持っていない。〈感情表出〉そのものや、〈感情描写〉の場合に、発話時との「同時性」が保証され、そのため、時制意味が現在となる。それが「状態性」と見なされている。これを整理して次のように言える。

〈感情表出〉の成立は、発話時との同時性という、一種の状態性を発生させる。

4.2.3 動詞による〈感情表出〉文のテンス・アスペクト上の特徴

4.2.3.1 動詞による〈感情表出〉文の状態性

しかし、動詞による〈感情表出〉文の状態性は、状態動詞・形容詞がもともと持っている状態性や、テイルによって与えられる状態性と異なる。

- (1) ああ、腹が立つ。+[I]^{Ex} (感情表出動詞→〈感情表出〉文)
 (2) きのうちからずっと家の前に犬がいる。 (状態動詞)
 (3) きのうちからずっと腹立たしい。 +[I]^{Ex} (感情形容詞)
 (4) 私はきのうちからずっと腹が立っている。 (テイル)
 (5)*私はきのうちからずっと腹が立つ。

(2)～(4)における状態性は、その状態が継続中である中の一点として発話時がある、と言える。

(4)は経験者格が第1人称だが、発話時の感情状態を含むものの、その状態性が発話時に限定されていないため、「きのうちからずっと」の有無にかかわらず、自身のことをある程度の時間の幅を持って振り返った表現となり、その意味では、客観的な描写・報告という性質を帯びる。その時間の幅の中の一点である発話時の部分のみ〈感情表出〉の機能を持つことになるため、〈感情表出〉を一部含んだ〈感情描写〉とも言える。

4.2.3.2 時間的要素が引き起こす動作性

動詞による〈感情表出〉文は、時間性、アスペクト性そのものと相容れない。

「きのうちからずっと」のかわりに、「今」をつけても非文となる。

- (1) 私は今、腹が立っています。 (テンス副詞「今」=現在)
 (2) 私は今、ドキドキしています。 (")
 (3)? 私は今、腹が立ちます。

(4)? 私は今、ドキドキします。

ただし、(5)のように、テンス副詞が係助詞や副助詞で取り立てられていると受容度が高まる。他の時点と相対された現在時という意味になり、絶対的発話時への限定が薄らぐためか、と考えられる。

(5) 私は、あの頃は平気だったが、今は腹が立つ。

テンス副詞と共に起ると動作性を帯びてしまう。アスペクト副詞も同様である。

(6)*次第に(/*突然/*とうとう)腹が立ちます。(アスペクト副詞)

(7)は非文ではないが、発話時に限定されない超時的表現、いわゆる習慣的現在となり、〈感情表出〉文ではなくなる。

(7) 私は(正夫は)よく腹が立つ。(頻度副詞→〈感情表出〉文ではない)

これらの現象は、時間的要素と結びついたときに、感情表出動詞が動詞としてもともと持っていた動作性(動詞的性質)を呼び起こしてしまうためと考えられる。

4.2.4 〈感情表出〉の文機能からの制約

〈感情表出〉という文機能の「発話時の話者の主観内に私的に表れている何らかの感情の状態を他者に伝達するために言語化する」という機能的特徴は普遍的なものと考えてよいが、それが構文に対して課す制約は、当然、個別言語の構造によって異なる。

日本語において、感情動詞の語彙的意味は、単に「感情」であって、〈感情表出〉という文機能を果たすために必要な、“話者の”とか、“発話時の”といった制限的な意味をもともとそなえているものではない。従ってそれは、日本語の構文に一定の条件を課すことになる。4.2.1の命題内容条件中の②の人称の制約、③の時制の制約がそれに当たる。

また、「〈感情表出〉行為」は命題内容自体が「心理状態」という「状態」であることが求められる。なぜ、そうであるかという議論は言語哲学か、せめて認知科学の領域にならざるを得ないが、やはり「現在時」との完全な同時性に由来するのではないだろうか。しかし、日本語において感情動詞の語彙的意味は、そのような制限的意味をもっておらず、従ってそれが〈感情表出〉文に一種の状態性を付与する。

このことは普遍的なことではない。例えば、英語の感情動詞 *fear, want, like, believe, etc.* は語彙的意味の中に状態性を含んでいる。非過去形、第1人称主語の時に実質上、〈感情表出〉となるが、〈感情表出〉と〈感情描写〉に同じ様式が用いられるため、この点に於いて、文機能の違いが言語構造の違いに反映していないと言える。

4.2.5 〈感情表出〉と項構造——ヲ格を取らないこと

〈感情表出〉文が状態性を発生させることを認めても、「感情表出動詞」だけがそれに適していて、「感情描写動詞」がそれに適さないのはなぜだろうか。それは両者の項構造の違いに原因があるのではないかと考えられる。

一つの問題提起として、次に示す「感情表出動詞句」と「感情描写動詞句」のペアを見

てみたい。ここにはヴォイス的な対立が見られる。

(1) 感情表出動詞——感情描写動詞

気になる——気にする

腹が立つ——腹を立てる

心が痛む——心を痛める

愛想が尽きる——愛想を尽かす

これらから、「感情表出動詞」が共通してヲ格を取らないことが見て取れる。感情表出動詞の対象格(Ob)、あるいは原因格(Ca)の項にはガ格かニ格が用いられる。(2)、(3)はいずれも、感情表出動詞文による〈感情表出〉である。

(2)a. あの言い方が癪に障る。

b. あいつの顔が気になる。

(3)a. あの言い方に虫酸が走る。

b. 君の愚かさには愛想が尽きる。

ニ格なのかガ格なのかは、単に成句中で使っていない方の格助詞を用いているに過ぎない。つまり、「癪に障る」と「虫酸が走る」とで、対象格の取る形式格が異なるのは、成句の語源的な問題に帰着するだろう。

しかし、ヲ格を成句中に含む「腹を立てる、心を痛める、愛想を尽かす」は〈感情表出〉にはならないのである。そして、成句中にヲ格を含まない「気にする」さえも、対象格の取る格がヲ格であることに気づかされる。(4)は、経験者格(Ex)と対象格(Ob)の項構造までを含めた両者を対比したものである。

(4) 感情表出動詞句 —— 感情描写動詞句

([Ex]は)[Ob]が気になる——[Ex]が[Ob]を気にする

([Ex]は)[Ob]に腹が立つ——[Ex]が[Ob]に腹を立てる

([Ex]は)[Ob]に心が痛む——[Ex]が[Ob]に心を痛める

([Ex]は)[Ob]に愛想が尽きる——[Ex]が[Ob]に愛想を尽かす

両者を、自他動詞のように、共通の項構造から派生したものと仮定すると、感情表出動詞は、経験者格以外の項が主語化された場合の派生形ということになる。この場合、経験者格が命題の外に追い出される。そして、命題からはみ出た項は主題としてのみ言語化し得る。

そのことの傍証として、〈感情表出〉文の経験者格にガ格を付与すると必ず総記の解釈になる。本来、助詞ハで示されるべき主題がガ格で示されると総記の解釈になる。

(5) 「私はその問題は気になりません」「でも、私が気になります」

(6) 「こんなことで腹が立つやつはいるだろうか」「課長が腹が立つらしい」

感情表出動詞が主観性を強めるとき、経験者格を語彙的意味の中に取り込んでしまい、背景化する。それがいわゆる主題である。従ってその経験者格は話者自身であるのが自然である。これによって、形式上無主題の文が第1人称経験者格を主題として含意した有題

文である、と認められ、〈感情表出〉の命題内容条件を満たすことになる。

- (7) 感情表出動詞句 —— 感情描写動詞句
- ([Ex]は)[補文]ような予感がする——[Ex]が[Ob]を予感する
- ([Ex]は)[補文]ような感じがする——[Ex]が[Ob]を感じる
- ([Ex]は)[Ob]が聞こえる——[Ex]が[Ob]を聞く
- ([Ex]は)[Ob]が見える——[Ex]が[Ob]を見る
- ([Ex]は)[補文]と思う——[Ex]が[Ob]を思う

このような同語根の対応語彙をもともと持たない感情表出動詞句においても、経験者格は動詞の必須項であることをやめ、動詞の語彙的意味の中に取り込まれる。

- (8) 感情表出動詞句
- ([Ex]は)[Ob]にむかつく
- ([Ex]は)[Ob]に照れる
- ([Ex]は)[Ob]に鳥肌が立つ
- ([Ex]は)[Ob]が頭に来る

経験者格に対する視点の置きやすさには順位があって、久野(1978)のようにハイアラーキーで表現することができるが、言うまでもなく、最も経験者格に視点を置きやすいのは「話者自身」である。従って、経験者格のデフォルトは第1人称なのである。

〈発話当事者の視点ハイアラーキー〉

話し手は常に自分の視点をとらなければならない、自分より他人寄りの視点をとることができない。

1 = E (一人称) > E (二・三人称)

以上、見てきたような、感情表出動詞の項構造は感情形容詞と共通している。(9)に列挙したのは、感情形容詞と感情描写動詞との間に同語根の対応関係があるものを6組挙げたものである。感情形容詞の残りの3語は、対応する動詞はないけれども他の6語の感情形容詞と同じ構造である。

- (9) 感情形容詞 —— 感情描写動詞
- ([Ex]は)[Ob]が悲しい——[Ex]が[Ob]を悲しむ
- ([Ex]は)[Ob]が楽しい——[Ex]が[Ob]を楽しむ
- ([Ex]は)[Ob]が苦しい——[Ex]が[Ob]を苦しむ
- ([Ex]は)[Ob]が惜しい——[Ex]が[Ob]を惜しむ
- ([Ex]は)[Ob]が悔しい——[Ex]が[Ob]を悔やむ
- ([Ex]は)[Ob]が恥ずかしい——[Ex]が[Ob]を恥じる
- ([Ex]は)[Ob]が辛い
- ([Ex]は)[Ob]が嬉しい
- ([Ex]は)[Ex=肉体部分]が痒い

このようにして見ると感情表出というのは、本来ヲ格を取ってもおかしくない動詞の形

をとりながらも、感情形容詞と同じ文機能を担い得るように、共通の項構造を持っていることがわかる。(10)は、感情表出動詞・感情形容詞・感情描写動詞の三者に同語根の語彙があるもの二組について、その関係を示したものである。感情表出動詞と感情形容詞とが組になっていることが一目瞭然である。

- | | | | |
|------|---------------------|----|----------------------|
| (10) | 感情表出動詞句・感情形容詞 | —— | 感情描写動詞句 |
| | ([Ex]は)[Ob]に腹が立つ | } | ——[Ex]が[Ob]に腹を立てる |
| | ([Ex]は)[Ob]が腹立たい | | |
| | ([Ex]は)[Ex=肉体部分]が痛む | } | ——[Ex]が[Ob=肉体部分]を痛める |
| | ([Ex]は)[Ex=肉体部分]が痛い | | |

ただし、感情描写動詞句にもヲ格を取らないものがある。「～に怯える、～に悩む、～に飽きる、～に惚れる、～が気に障る、～にクヨクヨする、～にシヨンポリする」などである。従って、ヲ格を取らないことは感情表出動詞であるための必要条件であって十分条件ではない。

この点に関する例外として、《対人的情意表明》という特殊な発話機能をもたらす感情表出動詞について述べる。「疑う、恨む、軽蔑する、信じる、尊敬する」などである。これらは対象格をヲ格で表すが、しかも〈感情表出〉文となる。

- (11) 僕は君を憎む。
 (12) 私は先生を尊敬します。
 (13) あいつを信じるよ。

これらは、単に話者の情意を表明するだけでなく、話者が他者との間に「このような人間関係を築きます」という一種の宣言的な効力をもたらす。この効力は《意志表出》系の発話機能と共通性を持ち、経験者格に一種の意志性を付与する。このようにコントロール可能な経験者格は主題として背景化することなく、命題中の項を占める。従って動作動詞と同じ構造を取る。このことの検証として、命令文=化のテストをしてみよう。〈命令〉の第2人称主語が動作主格(Ag)であることは、大前提である。

- (14)*社長に腹が立て。
 (15)?社長に腹を立てろ。
 (16) 社長を信じる。

まず、(14)は命題構造内に意志性を付与することが可能な項が存在しないので、構造自体が命令文にそぐわない。(15)はガ格の経験者格を動作主格に入れ替えれば可能になる。ただし、「そういう気持ちになれ」という、異常なおしつけの感がぬぐえない。ところが、(16)には違和感が全くない。つまり、(16)の経験者格はもともと意志性をそなえた、動作主格に近い経験者格だったということが、このテストで確認できるのである。

Scarle(1979)などが Expressives の例として挙げているのはこの種の《対人的情意表明》に当たるものが中心になっているが、それは英語の感情動詞における項構造上の特徴に起因するものであろう。この点については、今後の課題としたい。

4. 3 感情表出動詞文による〈感情表出〉

4. 3. 0 本節の概要

感情動詞の分類、感情表出動詞の文法的特徴については4. 1、4. 2で詳しく考察したので、本節では、感情表出動詞文の用例を示しつつ、その語彙をなるべく多く挙げることを目的とする。従って、細かい分類を施した上で、そのそれぞれについて、構文上の特徴、文機能、発話機能などについて論述する。4. 1での分類に従って、Aという記号を用いる。

4. 3. 1 思考表出動詞文による〈思考表出〉

「思う」をはじめとする思考表出動詞の特徴は、引用節の補文を取ることである。それが命題内容条件を満たすとき、引用節は何らかの意味で必ず話者の主観が介在したものとなる。その文機能は〈思考表出〉である。ただし、その引用節の内容によって、最終的に生じる発話機能は多様化する。発話機能の発動には語用論的条件の充足が必要だが、ここではその記述は省略し、標準的な発話機能を五種にわたって記述するにとどめる。

これらの文はその補文（引用節）が独立文であった場合の発話機能を何ら変更しない場合が多い。特に補文が形容詞文の場合（A-Iのすべてにおいてその可能性がある）、～タイデス、～タハウガイイデスといった丁寧接辞デスへの直結が、いまだにフォーマルな表現として認知されておらず、その代替表現として～ト思イマスが用いられるという側面もある。その場合、述語の思考表出動詞自体は文体を整足させる働き以上の機能は担っていないと言える。ここでは、最終的に発話が担う発話機能に応じて、その述語に用いることのできる思考表出動詞の語彙が違っていることに注目しておく必要がある。その意味では「思う」だけはどの発話機能の場合にも述語として用いることができる点で特殊な語彙と言える。

4. 3. 1. 1 《情意表出》

感情形容詞文（イ形容詞、ナ形容詞を問わない）を補文とし、「と思う」や「と感じる」などで受けると、補文のみの場合と情報量のほとんど変わらない情意表出となる。ただし、記述的である分だけ、いくらか冷静な印象を与える。

(1) 心から悲しいと思う。 + [I]^{Ex}

(2) 東京の暑さの中で暮している人たちをお気の毒に思います。 + [I]^{Ex}（青春）

A-I-1 思考表出動詞文《情意表出》

【主題】 [I]^{Ex}

【命題】 + 〈+[I]^{Ex} (+[Ob]ヲ) +感情形容詞 -i/-da) ト + V -ru
 + 〈+[I]^{Ex} (+[Ob]ヲ) +感情形容詞 -ku/-ni-) + V -ru
 【語彙】 思う、感じる、……
 【文機能】 〈思考表出〉
 【発話機能】 《情意表出》

この場合、文機能としては〈思考表出〉の体裁をとりつつ、最終的な発話機能としては《情意表出》を遂行していることを示している。

また、A-2 情意表出動詞文を補文としても、主語の第1人称指定や状態性が打ち消されてしまい、補文の時制意味が現在ではなく未来となる。このとき〈情意表出〉にはならず、A-1-2 のような〈演述〉となる。特に《主張》の発話機能が多くの場合、発動するのである。

(3) ([任意の人称詞]ガ) 腹が立つと思う。 +[I]^{Ex}

4.3.1.2 《主張》

引用節をとって、話者の思考内容を表出する動詞を思考表出動詞とする。「～と思う」がその典型である。ただし、以下に見るとおり、思考内容といっても様々である。

(4) 江藤一家から一人の法学博士を育てるといのもなかなか意義があると私は思う。(青春)

(5) それから、それぞれの課で、何ができるか、考えてみることも大切だと思います。+[I]^{Ex} (女社長)

(6) それを直せなんだから恥辱この上もないと思う。(葦手)

(7) 私はこの力を以て己れを鞭ち他を生きる事が出来るように思う。(小さき)

引用節には丁寧表現や終助詞など対人関係的な文要素が入り得ない点で、発話動詞の引用節と異なる。

(5)' 考えてみることも大切ですと (言う/*思う)。

(5)" 考えてみることも大切だねと (言う/*思う)。

(4)~(7)では、命題が真であることを話者の判断として主張し、多くの場合、他者の判断との相違が顕著な語用論的条件のもとで用いられるので、一般的には《主張》の発話機能を果たす。

A-1-2 思考表出動詞文《主張》

【主題】 [I]^{Ex}
 【命題】 + [補文]ト/ヨウニ + V -ru
 【語彙】 思う、確信する、考える、見当がつく、察する、察しがつく、信じる、推察する、推測する、想像がつく、判断する、見る、わかる、……
 【文機能】 〈思考表出〉

【発話機能】《主張》など

この構文については、(9)との類似から「と思う」をモダリティ形式の一種と考える論考もある（例えば森山(1990)の注1など）。

(9) 考えてみることも大切だろう。

これらは先に述べた条件のもとで、第1人称経験者格や非過去時制などの諸要素が複合して、全体としてモダリティ意味が発生している。「ト思ウ」をモダリティ形式の一種と考えることは、その形式だけにモダリティ意味の所在を限定することになり、厳密ではない。

4.3.1.3 《意志表出》、《宣言》

同じ「と思う」でも、引用節にモダリティ形式が全く入らないわけではない。第1人称の動作主格を指定しておけば、ヨウやタイを入れることができる。

(10) 私たちの手紙のやりとりは、これを最後にしたいと思います。(錦繡)

(11) これからは東北の田舎町の、十六七の青二才どもを相手にして、彼等の良き友となり良き教師となって、静かに生きて行こうと思う。+[I]^{Ex} (青春)

(12) 第一回の幹部会議を開きたいと思います。+[I]^{Ex} (女社長)

(13) 私は、山本五十六をめぐるたくさんの「もしも」の中の、ごく小さな一つの「もしも」からこの物語を始めようと思う。+[I]^{Ex} (山本)

(10)~(13)はいずれも、「話者が当該の行為Aを実行可能である」という語用論的条件の充足を前提として、話者自らの未来の行為への《意志表出》という発話機能が発生する。(12)について言えば、「会議を開く」行為が実行可能であるためには、「PC1:話者が行事の執行について権限を有している立場の者であること」が必要となる。さらに(12)、(13)に関しては、未来の行為というより、この発話そのものが、発話時に一つの《宣言》を行っていると考えることができる。その場合には、(12)では、「PC2A:今まさに当該発話を示す行事進行が認知された時日、場所にあること」「PC2B:話者が行事の進行を司る立場の者であること」、(13)では、「PC2A:当該発話が『物語』の一部に相当すること」「PC2B:話者が『物語』の語り手であること」といった新たな語用論的条件がPC1に累加されなければならない。(12)、(13)のそれぞれの出典においては、いずれもPC2が満たされて《宣言》の発話機能が発生している。

なお、(12)では、PC1'とPC2Bが両立しない場合もあり、純粹に《宣言》であるためには、PC1'は不必要である。

A-I-3 思考表出動詞文《意志表出》《宣言》

【主題】[I]^{Ex}

【命題】+〈+[I]^{A*}+V-yoo/-tai〉ト+V-ru

【語彙】思う、考える、希望する、願う、……

【文機能】〈思考表出〉

【発話機能】《意志表出》、《宣言》

4. 3. 1. 4 《助言・忠告》

この構文では、動詞命令形を用いたいわゆる命令文を補文とすることはできないが、助言の「タホウガイイ」、「トイイ」、忠告の「ベキダ」等が第2人称の動作主格とともに用いられることで、命令文に準じる発話機能をもった文については、この構文の補文とすることができる。

(14) すぐにも出かけたほうがいいと思う。 + [I]^{EX}ハ + [II]^{AG}

A-1-4 思考表出動詞文《助言》《忠告》

【主題】[I]^{EX}

【命題】 + 〈 + [II]^{AG} + V -タホウガイイ/トイイ/ベキダ〉 ト + V -ru

【語彙】思う、考える、……

【文機能】〈思考表出〉

【発話機能】《助言》、《忠告》

4. 3. 1. 5 《依頼》

文末が「テホシイ」、「テモライタイ」となる文では、第1人称の受益者(Bf)と第2人称の動作主格(Ag)が含意されれば、依頼の発話機能が発生する。この場合もやはりこの構文の補文とすることができる。ただし、直截さが薄れ、いくぶん婉曲的になっている。

この《依頼》、及び、A-1-4の《助言》《忠告》は、相手の未来の行為をしむける《指動》系の発話機能を発動している。

(15) 故に、甲神部隊員のうちでも我が小島村出身者を一人でも多く救出し、やがては来るものと覚悟せねばならぬ日に於ける村の防衛に万全を期せらるるよう、救出救護して帰って来てもらいたいと思う。 + [I]^{Bf-EX} + [II]^{AG}
(山本)

A-1-5 思考表出動詞文《依頼》

【主題】[I]^{EX}

【命題】 + 〈 + [I]^{Bf} + [II]^{AG} + V -テホシイ/テモライタイ〉 ト + V -ru

【語彙】思う、望む、期待する、……

【文機能】〈思考表出〉

【発話機能】《依頼》

4. 3. 2 情意表出動詞文による〈情意表出〉

4. 3. 2. 1 《情意表出》

思考動詞のように、補文の意味によって〈情意表出〉を行うのではなく、純然とその動詞の語彙的意味によって〈情意表出〉を行う、という点で感情表出動詞の中では最も標準的と言える語彙を「情意表出動詞」と呼ぶ。情意表出動詞は語彙が豊富であり、語構成ごとに分けて示したい。

- (1) ところが、「こりゃあ困る」(+ [I]^{Ex}) これはいかん」と云って僕に突き返した。(黒い雨)
- (2) おぼつかないなんて、いっちゃ困るよ。+ [I]^{Ex} (死者)
- (3) バスは時間が不定期で困るよ。+ [I]^{Ex} (女社長)

A-2-1a 情意表出動詞文 (単独)

【主題】[I]^{Ex}

【命題】+ [Ca]ニ + V -ru

【語彙】困る、しびれる、白ける、じれる、清々する、照れる、悩む、むかつく、めげる、妬ける、……

【文機能】〈情意表出〉

【発話機能】《情意表出》

なお、(3)から、「困る」がデ格を取るように見えるが、この種の文については複文であり、この場合のデは従属節「バスは時間が不定期だ」という形容詞述語の語尾ダの中止うが形(いわゆる連用形)と考えるのが適切である。主節の動詞「困る」に対して、意味的には原因を表しているが、構文的には格関係ではないと考える。

また、情意表出動詞には、慣用的な成句表現が多いのも特徴である。感情表出動詞の中にはガ格をとるものも少なくないが、人称制限、動詞の尊敬語化や、再帰代名詞の先行詞になるなど、主語が持つ特性は一切そなえていない。これらは全体で一つの語彙的意味を有する一語と捉えるべきである。以下、文機能、発話機能については同じなので省略する。

- (4) 「わしゃあ、むらむらと腹が立つ」+ [I]^{Ex} (黒い雨)
- (5) 「本当にいやなはずらね。嘘と分かっているも腹が立つわ」+ [I]^{Ex}
(女社長)

A-2-1b 情意表出動詞文 (成句)

【主題】[I]^{Ex}

【命題】+ [Ca]ニ / ガ + V -ru

【語彙】頭に来る、怒り(嫌悪感)を覚える、関心(興味)がある、気が急ぐ、気が立つ、気が咎める、気が晴れる、気が滅入る、心が痛む、心が和む、癪に障る、鳥肌が立つ、腹が立つ、はらわたが煮えくり返る、身の毛がよだつ、虫酸が走る、胸踊る、胸が高鳴る、良心が痛む、……

格については、成句で用いられている格助詞がガ格の場合、対象格(Ob)は二格で表示され、成句で二格が用いられている場合には、反対に対象格は二格で表示されるという法則が見られる。これはそれぞれの格の特性とはほとんど無関係のようである。

(6) あんな喉の黄色い手合が、校長の自分よりも生徒に慕われているとあつては、
第一それが小癩に触る。 + [I]^{Ex} (破戒)

(7) あの言い方に虫酸が走る。 + [I]^{Ex}

擬態語サ変動詞が多いのも情意表出動詞の特徴である。

— A-2-1c 情意表出動詞文 (擬態語) —

【主題】 [I]^{Ex}

【命題】 + [Ob]_二 + V -ru

【語彙】 イライラする、ウキウキする、ウンザリする、カリカリする、ゾツとする、クラクラする、ゾクゾクする、ドキドキする、ハラハラする、ムシャクシャする、ヒヤヒヤする、フラフラする、ムカムカする、ムズムズする、ワクワクする、……

表出される情意の語彙的意味が、動詞ではなくガ格名詞句によって表現され、動詞は形式動詞「スル」のみとなるような表現もある。これによって表現される情意は、話者の内部で生じた内的経験(多くの場合、生理的な変調)を表す語彙群だが、そのすべてが、この構文に使えるわけではないことは、(9)からわかる。

(8) 「大丈夫。吐き気がするだけなんだ (+ [I]^{Ex}) 」と私は答えた。(世界)

(9) (頭痛 / *歯痛 / *腰痛) がする。

— A-2-1d 情意表出動詞文 (スル) —

【主題】 [I]^{Ex}

【命題】 + ([任意の連体句]) + [内的経験] が + su-ru

【語彙】 [内的経験] = { 悪寒、寒気、頭痛、動悸、吐き気、耳鳴り、胸騒ぎ、目まい、…… } がする

4. 3. 2. 2 《主張》

直前にスル型の情意表出動詞について考察したが、これとほぼ同じ構文を持っていながら、ガ格によって示される内的経験が、しばしば命題を補文とする名詞節を構成する場合がある。補文標識として、トイウ、ヨウナなどが介在することもある。この場合、A-1-2「思考表出動詞文による《主張》」とほぼ同じ発話機能を発生する。ただし、思考表出動詞の場合よりも、直観に依存する度合いがいくらか強い。

(10) かなり長時間を要したような気持がする。 + [I]^{Ex} (黒い雨)

(11) 椅子に座って、部屋の中を見渡すと、入り口の所で、立って見たのと、また違う部屋のような気がする。 + [I]^{Ex} (女社長)

(12) ここでは、宇都宮までは、何をしたって安全でしかないという気がする。

4. 3 感情表出動詞文による〈感情表出〉

+ [I]^{Ex} (マルス)

(13) 第一、涼しいところで、さそや気持ちよく勉強できるだろうと、羨ましい気がします。+ [I]^{Ex} (青春)

(14) 日本の市街を作るのは、日本の経済力だろうという気がする。少なくとも新宿西口の様相には、それが露骨に感じられた。そして、今後は、あらゆる場所で、そのような街づくりが進められて行くに違いないという予感がする。

+ [I]^{Ex} (風に)

A-2-2 情意表出動詞文《主張》(スル)

【主題】 [I]^{Ex}

【命題】 + [任意の連体節・句] + [内的経験] ガ + su-ru

【語彙】 [内的経験] = { 感じ、気、気持ち、予感、…… } がする

【文機能】 〈情意表出〉

【発話機能】 《主張》など

4.3.2.3 《对人的情意表明》

ここに挙げるのは、文機能としては〈情意表出〉なのだが、聴者が想定される発話においては、その聴者に対する情意を積極的に表明する発話機能をもつことが多い。これを《情意表出》の一種として特に限定的に《对人的情意表明》と呼ぶことにする。

(15) 「ありがとう！ 感謝するわ」 + [I]^{Ex} (女社長)

(16) 「僕は君の幸福をのぞむよ」 (友情)

ただし、情意の対象が相手ではなく第三者の場合もある。その場合は、通常の《情意表出》となる。(17)の場合は、さらに相手への《皮肉》という間接的効力が発生した特殊例である。

(17) 「全く、お前に給料を払っている会社に同情するよ」 + [I]^{Ex} (女社長)

A-2-3 情意表出動詞文《对人的情意表明》

【主題】 [I]^{Ex}

【命題】 + [I]^{Ex} ガ + [II]^o ニ / ヲ + V -ru

【語彙】 疑う、恨む、恩に着る、感謝する、期待する、軽蔑する、信じる、信用する、尊敬する、同意する、同情する、評価する、憎む、望む、……

【文機能】 〈情意表出〉

【発話機能】 《对人的情意表明》

对人的情意 = 疑惑・感謝・期待・信頼・尊敬・評価等

4.3.3 感覚表出動詞文による〈感覚表出〉

A-2 の情意表出動詞と似ているが、話者の肉体の上で生じる内的経験に対する志向性が

4.3 感情表出動詞文による〈感情表出〉

強く、外的原因への志向性が弱く、そのため語彙的意味が身体的・直接的で、人格や主観による把握という意識が弱い点が特徴である。それでも一応、外的原因を表示できる構文を持つもの②と、持たないもの①とがある。①（例文(1)～(3)）の場合、強いて外的原因を表示する場合には、格助詞句「～ノセイデ」などを用いなければならない。②（例文(4)、(5)）は感情形容詞の構文に近い。

(1) あまり血が出るので、何ということもなく「私」という血文字を書いてみた。

いまその指先はちよつとだけ痛む。+[I]^{Ex}（二十歳）

(2) 私の心の憶れていたこのものの、最初の印象を思い出すと、今でも私の胸はうずく。（野火）

(3) 神経痛でひざがズキズキする。+[I]^{Ex}

(4) 近所の工事現場の音が頭に響く。+[I]^{Ex}

(5) 靴底が足の裏にチクチクする。+[I]^{Ex}

(6) 注射が痛い。+[I]^{Ex}

A-3 感覚表出動詞文

【主題】[I]^{Ex}

【命題】①（+[Ca]ノセイデ）+[Ex=肉体部分]ガ+V-ru

②+[Ca]ガ+[Ex=肉体部分]ニ+V-ru

【語彙】①痛む、うずく、しびれる、スツとする、ふるえる、

{歯、骨、関節など}が～ガクガクする、キリキリする、ズキズキする

{胸}が～ドキドキする、ムカムカする、{頭}が～クラクラする、ガンガンする、

{目}が～チカチカする、ショボショボする、{背筋}が～ソクソクする、

{鼻}が～グズグズする、{腹}が～ゴロゴロする、

{皮膚}が～カサカサする、ヒリヒリする、チクチクする、ムズムズする、……

② {音}が{頭}に～響く、{水、薬など}が{目、歯、皮膚}に～しみる、……

【文機能】〈感覚表出〉

【発話機能】《感覚表出》

4.3.4 知覚表出動詞文による〈知覚表出〉

意味的に感覚表出動詞に類すると思われる語彙として、聴覚、視覚、といった知覚を表す動詞群がある。実例を挙げる。

(1) 隣の物干の暗い隅でガサガサという音が聞こえる。+[I]^{Ex}（交尾）

(2) こういうマンションでは、音の伝わり方は複雑なので、上下の部屋のドアの音が、まるで我が家のそれのように聞こえる。+[I]^{Ex}（女社長）

(3) なぜかこの頃になると潮騒がいつそう高く聞こえる。+[I]^{Ex}（若き）

(4) 静まり返った教室に必死でノートする音だけが心地よくサラサラと聞こえる。
+[I]^{Ex}（若き）

4.3 感情表出動詞文による〈感情表出〉

(5) おめえにもなんかあるかい、と言われると、吾一は黙っているわけにはいかなかった。これでは、さも何もできないように聞こえる。+[吾一]^{Ex} (路傍)

(1)は文字通りの聴覚の表現、(2)~(4)は聞こえの徴証を副詞句によって表現している。(5)は作品の語り手が登場人物に感情移入した文だが、意味的にも「理解される、受け取られる」という意味で特殊である。「見える」においても、視覚そのものの表出と、(8)のように話者の捉え方を表現している場合とがある。

(6) 「焚火をしてますわ」と妻がいった。小鳥島の裏へ入ろうとする向う岸にそれが見える。+[I]^{Ex} (焚火)

(7) その先が青くぼんやり光って見える。+[I]^{Ex} (焚火)

(8) 自分達の胸には何となく快活な気分が往来している。その辺のどんな一隅でも、そのままに妙に面白く見える。+[I]^{Ex} (雪の日)

一般的に見て視覚、聴覚は公共性が強く、第1人称経験者格を明示するためには属性形容詞と同様に個別化の二格を用いる必要がある。

(9) 私にはガサガサという音が聞こえる。

この場合、「私は」を補うと、〈知覚表出〉ではなく、人物の潜在的な能力を表す〈属性叙述〉の意味が強くなる。

(10) 私は小さい音が聞こえる。

以上のように、この種の知覚を表す文においては、〈情意表出〉とも〈感覚表出〉とも異なる構文特徴を有するので、〈知覚表出〉という文機能を認める。〈知覚表出〉もまた、4.2に示した命題内容条件を必要とするものであり、〈感情表出〉の下位分類に位置づけられる。これに用いられる動詞を知覚表出動詞とする。

A-4 知覚表出動詞文

【主題】[I]^{Ex}

【命題】+[I]^{Ex}ニ+[Ob]ガ+V-ru

+ [I]^{Ex}ニ+[補文](ト/ヨウニ)+V-ru (聞こえる、見える、のみ)

【語彙】聞こえる、見える、わかる、目につく、鼻につく、……

【文機能】〈知覚表出〉

【発話機能】《知覚表出》

4.3.5 〈演述〉系の知覚状態動詞文について

嗅覚を表出する「におう」も意味的には知覚表出動詞「見える、聞こえる」によく似ている。

(1) ほのかに、白粉の香りが、男くさい九万之助の部屋にただよった。これは、なんと、三浦金太郎の耳から匂うのである。(剣客)

しかし、「におう」は「見える、聞こえる」と違って、経験者格の潜在的な能力を表さなため、「私は」を補うと非文となる。

4.3 感情表出動詞文による〈感情表出〉

(2)*私は白粉の香りがにおう。

ただし、対象格を主題とする〈属性叙述〉は可能である。

(3) 課長は胃がわるいのでひどく口が匂う。(パニ)

さらに、サ変動詞系の知覚表現のうち、「音がする、味がする、臭いがする」や触覚を表現する擬態語「ザラザラする、ベトベトする、チクチクする」、嗅覚を表現する擬態語「プンプンする」などは、二格を用いてもなお、経験主体を表現できない。

(4) かあアんという音がして、きなくさい匂がする。(黒い雨)

(5) ドアの前まで来ると、中からザワザワと人の話し声がする。(女社長)

(6) 艦内ハ湿ツボク、身体中ジメジメスル。(検家)

(7)*私には人の話し声がする。

経験者格は決してないわけではなく、嗅覚、触覚の主体に相当する第1人称経験者格が命題内容条件Aの①を満たしていることは間違いないのだが、言語表現としては第1人称経験者格は、省略ではなく完全に潜在化している。従って、これを感情表出動詞の下位分類である知覚表出動詞に加えておくわけにはいかない。そして、この種の動詞が述語として果たす文機能は〈状態描写〉か〈属性叙述〉のいずれかである。ここでは「知覚状態動詞文」としておく。

知覚状態動詞文

【主題】 ([Ob])

【命題】 ① + [Ob]ガ + V -ru

② (+ [Ob]ガ) (+ 任意の連体句) + [知覚表象]ガ + V -ru

【語彙】 ①におう、鼻をつく、

(擬態語)ゴワゴワする、ザラザラする、ジメジメする、スベスベする、チクチクする、ツルツルする、ヌルヌルする、ネトネトする、ネバネバする、ベタベタする、ベトベトする、ムンムンする、プンプンする、……

②[知覚表象] = {味、音、香り、感じ、気配、声、手触り、匂い、……} がする

【文機能】 [Ob]がないか、主題化しない場合〈状態描写〉

[Ob]が主題化する場合〈属性叙述〉

【発話機能】 《知覚表出》、《報告》、《主張》など

これらと A-2-1d、A-2-2 のスル型の情意表出動詞文と、形式は類似しているが、その感覚・知覚の内容が、発話者自身の内側で生じるものとみなすか、発話者の外側の現象の知覚である(つまり、公共性が高い)とみなすかの違いが、両者の構文上の違いに反映していると考えられる。

感覚表出動詞と知覚状態動詞の構文的な違いについては、情報帰属理論の表示法に基づいて [図1] のように示される。

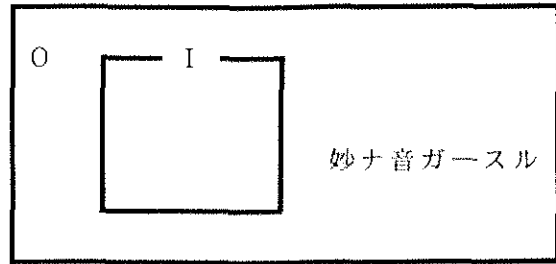
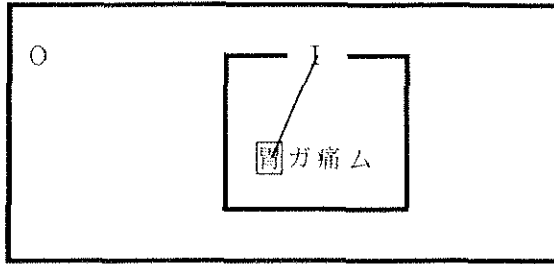
[図1] 感覚表出動詞文による〈感覚表出〉と知覚動詞文による〈状態描写〉

(8) 胃が痛む

〈感覚表出〉

(9) 妙な音がする

〈状態描写〉



感覚表出動詞としても知覚表出動詞としても用いられる特殊な動詞として「チクチクする」が挙げられる。(10)は肉体部分をガ格で表示する、感覚表出動詞である。一方、(11)は外的対象に対する触覚の表現であり、知覚表出動詞である。

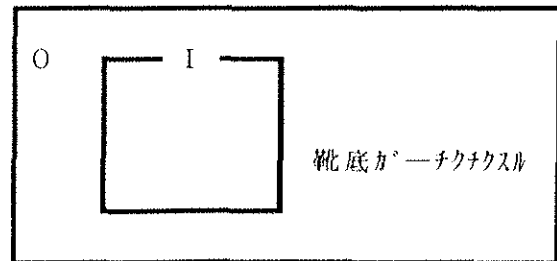
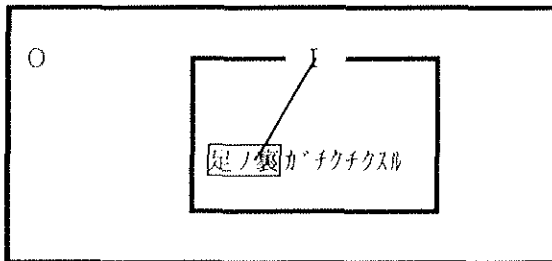
(10)a. 足の裏がチクチクする。 + [I]^{Ex}

b. 靴底がチクチクする。

[図2] 感覚表出動詞文とも知覚状態動詞文ともなる動詞「チクチクする」

a. 足の裏がチクチクする 〈感覚表出〉

b. 靴底がチクチクする 〈状態描写〉



(10)aは、(11)aのように第1人称の経験者格を表現できるが、(10)b.では(11)b.が非文となり、(12)のように個別化のニが必要となる。

(11)a. 私は足の裏がチクチクする。

b.* 私は靴底がチクチクする。

(12) 私には靴底がチクチクする。

この点でも、知覚状態動詞文は形容詞文の分類における属性形容詞文に対応する構文的特徴を有していると言える。

また、感覚表出動詞と知覚状態動詞はこの「チクチクする」などの若干の例外を除き、異なる語彙を有している。しかしながら、その意味素性は実は共通しているのではないかということが、その例外である「チクチクする」から窺わずもうかがえる。つまり、対象格が肉体部分=内的対象ならば感覚表出動詞、外的対象ならば知覚状態動詞、というように、対象格を自己内外のいずれに帰属させるかがその動詞文の構文的特徴に反映することになる。

4. 4 感情変化動詞文による〈感情表出〉

4.4.1 感情変化動詞文が〈感情表出〉となるための条件

感情の変化を表現する一種の変化動詞（瞬間動詞）で、一般に過去を表す時制形式-taを用いて、変化後に維持されている感情状態を表現する動詞群がある。これを「感情変化動詞」と呼ぶ。この場合、次のような条件が必要になる。

〈感情表出〉の命題内容条件

B 述語が感情変化動詞の場合

- ②主語が第1人称経験者格であること
- ③過去時制辞-taを接続すること
- ④モダリティ付加辞を接続しないこと
- ⑤アスペクト接辞を接続しないこと

次に挙げる例文は、いずれも上記の命題内容条件を満たし、〈感情表出〉の文機能を有している。

(1) 「思ったより元気そうね。ホッとしたわ（+[I]^{Ex}）」（女社長）

(2) 「ああくたびれた。（+[I]^{Ex}）なかなか運搬はひどいやな。」（セロ）

感情変化動詞も、感情表出動詞と同様、〈感情表出〉文で用いられることが圧倒的に多く、第1人称に指定された主語は省略しやすい。(1)、(2)においても、第1人称経験者格（+[I]^{Ex}）は含意されている。

そして、過去時制辞-taが用いられているにもかかわらず、いずれの例も、過去の情意ではなく発話時現在の情意を表出している。(3)は、(1)と同じく情意変化動詞「ホッとする」を述語とし、過去時制辞-taも用いられているが、第3人称主語が明示され、モダリティ付加辞「ようだ」も用いられており、上記の条件に二つ反している。この場合は、〈事象描写〉となる。

(3) 私が言うと、崔はホッとしたようだった。（一瞬）

(4)～(6)はいずれも情意変化動詞「がっかりする」を述語とする文だが、〈感情表出〉は(4)のみである。(5)は(3)と同様、〈事象描写〉である。

(4) 純子はずまらなように、「がっかりしたわ。（+[I]^{Ex}）髪はモジャモジャ、ヒゲはのび放題、ボロボロの服に、足を鎖か何かでつながれて来るかと思ったのに」（女社長）

(5) 女は顔をそむけ、ひきつったような表情をうかべた。がっかりしたのだろう。（砂の女）

(6)に関しては、「ものだ」はモダリティ付加辞の働きをしておらず、削除しても、意

味は変わらない。となると、この文は上記の条件に何ら反していないことになるが、文脈上、過去の感情を回想したものとなり、従って文機能は〈感情表出〉ではなく、客観的なできごととして描写する〈事象描写〉となる。

- (6) 「恭子さんが結婚したときには、ほくはずいふんががっかりしたものですよ。
ご主人はレスラーみたいに大きな人だったそうですね」 (砂の上)

上記の条件には時制辞に関する条件③が含まれているが、時制意味に関する条件を明記していない。時制意味は入力側ではなく出力側の特徴と考えるからである。従って、この条件は〈感情表出〉という文機能が発動するための必要条件ではあるが、十分条件ではない、ということになる。

4.4.2 感情変化動詞のアスペクト的意味特徴

感情変化動詞が、アスペクト的動詞分類では変化動詞（瞬間動詞）の一種に当たるとは、4.1で述べた。ただし厳密に言えば、変化動詞の特徴が見られるのは〈感情表出〉以外の文においてである。

例えば第3人称主語である(1)においては「減る」という事象が継続しているわけではなく、結果が残存していると解釈するのが自然である。これは変化動詞の特徴である。

(1) ひろしは腹が減っている。

(1)と、(1)をタ形にした(2)とでは、意味が全く異なっている。

(2) ひろしは腹が減った。

ここで、(1)と(2)の意味は明確に異なっている。それは「ドアが開いている」と「ドアが開いた」の意味が異なるのと同様の関係である^{*)}。

ところが、主語が第1人称である〈感情表出〉の場合には、タ形とテイル形の意味が接近している。このことは特殊な現象であり、これを見る限り、通常の変化動詞とは性質が異なることがわかる。

(3) 私は腹が減った。

(4) 私は腹が減っている。

このような感情変化動詞のアスペクト的意味特徴について、感情変化動詞を用いた〈感情表出〉の実例である4.4.1の(1)「ホッとした」、(2)「くたびれた」、(4)「がっかりした」などから帰納して、以下のように言うことができる。

第一に、この種の動詞の語彙的意味が表すものは、「何らかの外的要因によってもたらされた感情の変化」である。そして、それが-taを伴う文は、「過去に起きた変化そのもの」（仮に意味 α とする）と、「その変化結果が持続する現在の状態」（同じく意味 β と

*1 厳密には、(2)が適格なのは小説の語りの文体のように、感情移入する場合に限られており、本来なら(2)'のようにモダリティ付加辞を付けなければならない。

(2)' ひろしは腹が減ったらしい。

4.4 感情変化動詞文による〈感情表出〉

する)とが、両方同時に表されているということである。そして、特に意味 β によって〈感情表出〉たり得るのである。

第二に、感情の変化が生じた過去というのは、現在と隣接する直近の過去であること。一日前に起きた感情の変化の回想であっては、意味 β は含意されず、もはや〈感情表出〉とならない。従って、4.4.1の(6)のような〈事象描写〉となる。

第三に、いずれも感情の極めて直接的な表出であるためか、概して文構造が単純である。4.4.1の(2)、(4)のように、〈感情表出〉文を独立語文のように発して、その後、感情の変化をもたらした外的要因について整然と述べる、といった例が非常に多い。

このように、過去時制辞を伴いながら時制意味が現在となり、現在の状態を表す例は、日本語ではこの種の文しか見当たらない。動作動詞の一種としての変化動詞(瞬間動詞)は、-*tei-ru*を接続することによって、意味 β を表すことはできる。例えば、「窓が開いている」という文は、現在の「窓が開いている状態」の表現として用いられる。しかし、この文には意味 α は絶対に含意されない。一方、意味 α の表現である「窓が開いた」という文は、意味 β を含意することはあり得ない。

次に、感情変化動詞の意味特徴による下位分類に従って、語彙、用例とその発話機能について検討を行う。

4.4.3 思考変化動詞文による〈思考表出〉

例文(1)は副詞「とっさに」によって、この文が表現する思考の変化が、直近の過去に起きたものではなく、回想であることを示しており、従って、〈思考表出〉とは言えないが、参考までに挙げた。

- (1) とっさに、すばらしい考えがひらめいた。(+[I]^{Ex}) 子供をつかまえて、楯にすればいい！ 子供を人質にして、やつらの接近をはばむのだ！……
(砂の女)

従って、「とっさに」を外し、「ひらめき」の直後の発話として(2)を想定すれば、〈思考表出〉となる。

- (2) すばらしい考えがひらめいた。(+[I]^{Ex}) ……

この文は、後に続く「すばらしい考え」の内容を命題として、聴者に対しては、《主張》の発話機能を有する可能性が高い。当然、この発話は聴者が保持せず、かつ不確実な命題であるという語用論的条件のもとで発話される可能性が高いからである。

B-1 思考変化動詞文《主張》

【主題】 [I]^{Ex}

【命題】 + ([Ob]/[補文]コト)ガ/ヲ/ニ+V-ta

【語彙】 (~ヲ) 思いつく、(~ニ) 気がつく、(~ガ) ひらめく、……

【文機能】 〈思考表出〉

【発話機能】《主張》など

4.4.4 情意変化動詞文による〈情意表出〉

既に、4.4.1 で用例として挙げた(1)、(2)、(4)は、情意変化動詞文による〈情意表出〉の例である。次の(1)~(3)も同じく典型的な〈情意表出〉の例である。

- (1) 「これはあきれた。(+[I]^{β*})だれも知らないのですか。シマのあるウマのことをなんていうんですかかねえ？」 (ブン)
- (2) 相手は佐川という頑丈な男だ。結納はまだだが、とにかく話だけは決めてホッとしたよ。(+[I]^{β*})母もふじ子も安心したようだ。(塩狩峠)
- (3) 「ああ、驚いた。(+[I]^{β*})まだまだとても譲治さんとは踊れやしないわ、少し内で稽古なさいよ」 (痴人)

この構文では大半の例において、情意の変化そのものに当たる意味 α が非常に弱く、意味 β 、つまり現在持続する情意の状態を意味する比重が大きい。これらは、本来「変化結果の持続」とは言い難いが、この構文を借りて表現しているものと言える。まず、(4)~(6)は「くたびれる」の例である。

- (4) そして一日遊び抜いて、日が暮れるとガッカリ疲れて「ああ、くたびれた (+[I]^{β*})」と云いながら、ビッシヨリ濡れた海水着を持って帰って来る。(痴人)
- (5) 「何でもいいから早くしてくれ。いい加減くたびれたよ (+[I]^{β*})」 (女社長)
- (6) 「やい、いいかげんにしろ」と二人のうしろでどなる声がした、「なんの相談か知らねえが、こっちはいいかげん待ちくたびれたぜ、二人とも立ったらどうだ」 (さぶ)

(4)は肉体の感覚的な意味も読み取れるが、(5)、(6)は純粹に情意を表出している。(6)は複合動詞の例だが、「疲れる」などでも複合動詞の例は見られる。

(7)~(11)についても、「弱る、困る、参る」のそれぞれの瞬間が特定されるわけではない。つまり、情意の変化そのものの意味 α が非常に弱い。もつばら意味 β 、つまり現在持続する情意の状態を表している。これも「変化結果の持続」とは言い難い。

- (7) 「おまえのかど出にあたって、なんか祝ってやりたいんだが、弱ったな。…」 (路傍)
- (8) 伊木は狼狽した。「この頭で教壇に立たなくてはならぬのか、これは弱った」と、伊木は口の中で呟いた。(樹々)
- (9) 「どうも困ったな。先生にそういわれてしまっては……」 (路傍)
- (10) 「疲れたよ。時間を使って、金を使って、いったい何のためにやるかわかんよ」 (一瞬)

4. 4 感情変化動詞文による〈感情表出〉

(11) 憬子「参ったな……。壊れてないよ」 (君と)

(11)はシナリオ資料から採ったもので、憬子の部屋を訪ねてくる男性への言い訳づくりのためにステレオを壊そうとするのだが、なかなか壊れず、CDの音楽が流れてしまう場面である。要するに独白であって対人的な意味を持たない発話である。

B-2 情意変化動詞文《情意表出》

【主題】[I]^{E*}

【命題】(+[Ob]ニ/ガ)+V-ta

【語彙】あきる、あきれれる、あせる、安心する、怒る、驚く、困る、幻滅する、
さとり、疲れる、くたびれる、懲りる、弱る、参る、わかる、……

(成句)頭に來る、いやになる、腹が決まる、……

(擬態語)ガッカリする、サッパリする、スッキリする、スツとする、ホツとする、
……

【文機能】〈情意表出〉

【発話機能】《情意表出》など

これらの発話機能は一括して《情意表出》としたが、積極的に対人的情意を聴者に伝えようとするような発話においては、より踏み込んだ発話機能の記述が可能になるだろう。例えば、(1)では聴者への《失望の表出》となっているし、(5)、(6)では《催促》ともなるろう。

4. 4. 5 感覚変化動詞文による〈感覚表出〉

この構文の特徴は、感覚形容詞文、感覚表出動詞文の場合と同じで、話者の肉体の部分が表現されるか含意されている、ということである。「くたびれる」、「疲れる」に関しては、任意の肉体部分をガ格で取ることができる。次に例文を示す。

(1) 「足が痺れたんでね (+[I]^{E*}) 」と栄二が答えた、「ちょっと坐り直した
だけだよ」 (さぶ)

(2) 「腹が減った (+[I]^{E*}) 」と私は言った。「ねじでも食べられちゃいそう
だ」 (世界)

この種の構文では、「感覚の変化」に当たる意味 α の意味がほとんどなく、もっぱら意味 β 、つまり現在の感覚の状態を表すものである。

B-3 感覚変化動詞文《感覚表出》

【主題】[I]^{E*}

【命題】+[Ob] (= 肉体部分) ガ+V-ta (+[Ca]ノセイデ)

【語彙】{任意}が～くたびれる、{肩}が～凝る、{手足、皮膚等}が～痺れる、
{任意}が～疲れる、{頭}が～のぼせる、……

(成句)脚がつる、お腹が空く、のどが渴く、腹が減る、……

(擬態語) サッパリする、……

【文機能】 〈感覚表出〉

【発話機能】 《感覚表出》など

さて、本来現在の状態を表現する *-tei-ru* によって表現した(3)は、(2)と同じと言えるだろうか。

(3) 「本当に腹が減ってるんだ」と私は言った。「こんなに腹が減ったのは久しぶりだな」 (世界)

(3)では、たまたま話者自身の感覚を表していることになっているが、*-tei-ru* の文には主語の人称の制約がなく、異なる文脈のもとでは第3人称主語に関する〈状態描写〉ともなり得る。一方、(2)のような *-ta* の文を用いて、話者以外の人物の現在における感覚状態を表すことはできない(文学作品などで語り手が登場人物に感情移入して表現するものは例外とする)。つまり、テイル形の場合、主語が明示されていないと、文機能が定まらず、第1人称経験者格の主語が明示されるか、文脈や場面などの情報で示されなければ、〈感情表出〉とはならない。

それに対し、ル形による〈感情表出〉文は、命題内容条件の充足を前提とする文機能として、〈感情表出〉の機能が発動するものである。つまり、主語が明示されていなくても、命題内容条件②「主語が第1人称経験者格であること」は、類推によって補われて〈感情表出〉となるのである。

発話機能としては、《感覚表出》として一括したが、当然、語用論的諸条件次第で、(1)は《釈明》、(2)は《催促》といった、より高次の発話機能が発動することは言うまでもない。